

り、積雪量 50 cm の地点では生育の最大要因となり、それ以上西へは進出できないことになる。

以上のことからミヤコザサ帯のなかに阿武隈山系を中心としてチマキザサ帯の飛地ができた原因は次のように考えられる。昔は今よりもずっと雪が多かったのではないだろうか。もしそうだとすると、チマキザサ節は今よりももっと太平洋岸近くまで分布していたであろう。ところが年月の経過とともに雪がしだいに少なくなり、それにつれてチマキザサ節は雪の多い内陸へ後退し、山なら高い方へ移っていったであろう。そしてそれと同時にミヤコザサ節がチマキザサ節を追うように内陸へ張りだしたであろう。そのため孤立した山では山麓がミヤコザサ節にとりかこまれ、雪が多い高所にチマキザサ節がとり残されて飛地のようになったのではないかと考えられる。

年最高積雪の極の平均 50 cm がミヤコザサ節に対しては最大の要因となり、またチマキザサ節に対しては最小の要因となってそれぞれの分布域を支配する問題は植物の生活形の上から解明できる。チマキザサ節は春にでた新しい稈は高さ 1.5 m くらいになり、稈の中部以下の各節に 1 個ずつ冬芽をつけた状態で冬を迎える (図 33,

B, a)。降雪期には稈がおし倒されて植物体全体が完全に雪に埋まる。つまりそれによって冬の寒さと乾燥から保護されることになる。春に雪がとけると、稈は弾性によって立ちあがり、冬芽が伸びて枝となり、チマキザサ節本来の姿となる (図 33, B, b)。このような植物は生活形の上からは低木に属する。それに対してミヤコザサ節は稈が低く (40~80 cm)、その基部の地表面付近に

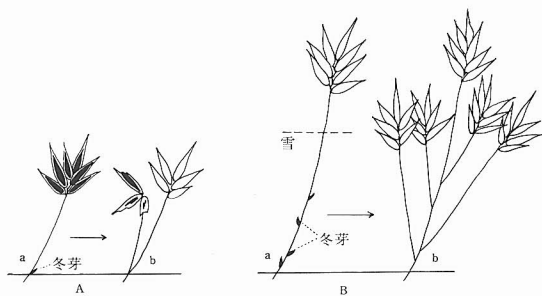


図 33 ミヤコザサ節 A とチマキザサ節 B の生活形
a. 冬、ただしチマキザサ節では稈が雪におし倒されて雪中に埋没する
b. 翌年の夏

1~3 個ほどの冬芽をつけた状態で冬を越し (図 33, A, a)、春に冬芽が伸びて新しい稈になる (同, A, b)。そして前年の稈は冬の寒さと乾燥によって痛めつけられ、その年の夏頃には枯れる。すなわちスキヤヨモギなどと同じく地上部は毎年枯れて新しいのと交代する。そのような植物は生活形の上で半地中植物という。

要するにミヤコザサ節は雪が少なく、冬に寒さと乾燥にさらされる環境に適応して、チマキザサ節から進化した形と思われる。北海道の東端、根室から太平洋の海岸線に沿い西南進し、さらに本州青森県から山口県までチマキザサ節とミヤコザサ節の分布域がたがいに相接してミヤコザサ線を形成し、連綿と続いているのは、その事実を物語るものであろう。そして年最高積雪の極